

ポツ  
プ  
コーン  
シヤ  
ワー

## 君が大人になつていく

僕の筆箱にはいつもシャーペン、シャー芯、消しゴム、ボールペン、モノサシが3セットずつ入っている。それは、忘れ物をしがちな隣の席の広川キエに貸すためのものだ。

「ねえ… ねえつてば… 泉地…くん」

高校に入学して初めて会った広川キエと最初に話をしたのは一番最初の数学の授業中だった。机に向かう僕の目の前に、ちよいちよい、ちよいちよい、と人差し指を動かしてみせて僕がその指をつたって見ると、彼女は大袈裟に困つたような顔をしていて

「ねえ、モノサシ貸してくれない？ すぐ返す！ ごめん！」

「あ…うん…え、えーと…：…どれがいい？」

僕はたまたま筆箱に入っていた3つのモノサシを急いで全部取り出して聞いた。

「…も…持ちすぎ…ふふ…ふふふふ…：…なんでモノサシ3つも持つてんの…

…もしかして…シャーペンの芯は…」

「…：…ど、どれがいい？」

僕が2BとHBとBのシャー芯を取り出すと

「うわ…出たあ！ ㄉㄤㄉㄤㄉㄤㄉㄤㄉㄤ…」

声を殺して笑う彼女のその横顔が目の表面に焼き付いて消えなくて、僕は次の日から布製の筆箱がパンパンになるまで筆記用具を詰め込んで学校に向かうようになった。

入学したばかりの頃の広川キエは、眉毛がふさふさとしていた。彼女はいつも2つに別れた前髪を耳にかけていたから、そのふさふさとした眉毛や、ほつぺたにある3つか4つのニキビがよりいつそう目立って見えた。

いつだったかの授業と授業の合間に彼女と目が合うと、窓側の彼女はほつぺたをサツと両手で隠して「ちよつとお、見ないでよ。もう、やだあ。高校は汗かかない吹奏楽部選んだのに、半年以上経ってもニキビ全然治ないんだもん」と自分から勝手に喋りだして、また大袈裟に困つたような顔をしたのをよく覚えている。

「ま、窓の外見てたんだけど？」

僕が精一杯の平静を装うと「恥かかされたあ。あはは」怒った顔を作ってみせて、彼女は笑った。

僕は広川キエが好きだ。

「なぜ？」とか「どこが？」とか、うまく説明できないけれど、彼女はよく笑い、分け隔てなく誰にでも優しい。理由なんてそれだけで充分じゃないだろうか。授業中にはしゃぎだしてよく裸になるバスケット部の加茂にでも、帰宅部でこれといった特徴など何もなく、女子と話せば無条件に挙動不審になっってしまうような僕にでも同じ笑顔を向けてくれる。体育の短距離走で6秒台で走った陸上部の竹田には早すぎと言って笑ったし、10秒台だった僕には遅すぎと言って笑って転げた。もちろん、彼女のそのふさふさとした眉毛もほつぺたのニキビの跡も、切れ長で小さな目も、僕とほぼ同じ高さの身長も、カバンに付いている目玉焼きのキャラクターのキーホルダーも全部いいけれど、やっぱり僕は広川キエの笑顔が一番好きだ。

彼女が朝のホームルーム前に自分に向けて1度笑ってくれただけで、その日家に帰るまで胸がじんわりと暖かった。

きつと彼女の笑顔はどんな難病でも治してしまう。その証拠に、いつだったかの昼休憩に広川キエの女友達が「いくよお？」と大きな声を出して投げたポップコーンを彼女は大きく体を反って口でキャッチして、「どんなもんよ。へへへ」と笑っているのを見た次の日の朝、僕は喘息が治っていた。

「キエ、パンツ丸出しだよ！」

「わつ…とつ！ あははははははは！」

実はこの時、黒板の方に顔を向けたまま目玉だけをおもいきり右に向けたせいで、その日は一日中目もとが痛かったのだけだ。

○

広川キエが学校に初めて化粧をしてきたのは高校1年の7月に入ってからすぐの月曜日だった。彼女のふさふさとした眉毛は綺麗に整い、頬に薄く塗られたファンデーションは彼女の3つか4つのニキビの跡を隠した。唇は彼女が笑う度にピカピカと光った。

「キエ、すごいいい感じじゃん！ かわいい！」女友達に言われて彼女は「へへへ」と照れた。

「さては彼氏できたんじゃないのお？」

「いやあ、できてないんだなこれが。あはは」

全神経を右耳に集中させながら僕は机に顔を向けたまま、ふう、と胸をなで下ろした。

「ほんとにいい？ あやしいねえ」

「ないつてば。あはは。吹奏楽部でさ、発表会とかあるじゃん？ なんかさ、皆の前に立つのにこんなんじゃ恥ずかしいなって思つて…ちよつとは私も、ね」

「絶対そっちのがいいよお」

「へへへ」

誰かの助言があつたのか、それとも本当に自分の意思なのかはわからないけれど、彼女はととても綺麗になつていった。

自分の好きな人が綺麗でいてくれるのは嬉しい。だけど同時に、隣の席でいつものように笑う彼女がどんどんと自分の手には届かない存在になつていくような気がして、僕は誰とも話していかないのに一人で挙動不審になつた。いや、そもそもから僕みたいな奴には広川キエは遠い存在だったのかもしれない。

彼女は誰にでも分け隔てなく笑うから、その笑顔で僕は彼女との距離を錯覚していたのかな。

きつと近いうちに彼女は誰かのものになる。告白？…僕じゃ…無理だ。僕は成績もよくないし、クラスで一番背の低い僕は一部の運動部の連中からホビット族というアダ名で呼ばれている。ホビット族の告白なんて誰がオツケーするんだ。

時間がない。

けど自信もない。

僕はなにかを始めなくては、ならない。今すぐに、なにかを…

いつたい僕は何をすればいいんだろう…

答えは見つからないままどんどんと時間だけが過ぎて、いつからか放課後にサックスケースを抱えて吹奏楽部の練習に向かう広川キエの背中を見ただけで僕は何とも言えない気分になるようになっていた。彼女のサックスの腕前が上げられるほど、自分と彼女の距離が開いていくように感じた。僕はまだ何も見つけてないのに…くそ…くそ…置いてかないでくれ！

制服が冬服に衣替えしてしばらくした放課後に、気付けば考えるより先に声が出ていた。

「あのさー！」

「ん？ 泉地くん…どしたあ？」

突然呼びかけられた彼女は少し驚いた顔をしたあとに、笑った。

「…あの…キエちゃんって…呼んでいい？」

「……………今さら？ あつははははは！ ……うん、いいいいよ！ キエちゃんって呼びなさい！ 入学してからの私たちの空白の時間を取り戻そ！ あはははは！」

「ははは…キエ…ちゃん、それじゃあまた明日」

「うん。また明日。あ、泉地くん…」

「ん？」

「私は何て呼んだらいいの？」

「え…あ…えーと…お…おせん…ち…」

「なにそれ！ おせんち！ ふふ…あはははは！ おせんち…あはは！ それじゃあ私部活行くね。…おせんち…ふふふふ…」

「はは…それじゃあ…また明日」

「うん、また明日」

その日の晩に、僕はハサミで眉毛を切った。切りすぎた。

次の日僕には「世界一怖くないヤクザ」という新しいアダ名がついた。

## 写真を撮るひと

冬休みが明けてすぐ。授業が昼前の二限で終わった金曜日の帰り道に、駅前の美術館で「リアリティー 世界の報道写真展」という展覧会がやっていたから、ちようど暇をしていたところだったし寄ってみることにした。学生証は持っていないかつたけど制服を着ていたからか、受付の女の人がガラス越しに「中学生1枚400円です」と口角を上げた。軽く会釈を返してチケットの半券を受け取って受付に背を向けてから、聞こえないくらいの声で呟いた。

「高1だし…」

会場の中は、色んな国の悲惨な光景を切り取った写真が所狭しと並んでいた。

ドラッグに溺れたボロボロの肌の少年、幼い子の死体を抱えて何かを集団で訴えている人、拷問される人、川を渡る親子を岸からマシンガンで狙う兵隊… お

もわず目を覆いたくなるような写真ばかりが並んでいるのに、どの写真も絵画のように美しい、という不思議な空間がそこにはあった。

中でも一番印象に残ったのは、飢餓でガリガリに痩せた黒人の少女が両手を広げ天を仰ぐその後ろで無数の鳥が「なにか」の肉の塊にたかっついて、群れの中の1匹だけが女の子をじつと見ている写真。まるで、おいしそうに。

出口付近の壁には大きな文字でこう書かれていた。

『写真は真実を写す』

美術館から出ると、駅と隣接したレンガ造りの建物を背にして芸能人なのか、ファッションモデルなのか、何かの写真撮影が行われていた。カメラマンが頻りにいーね いーね かわいい、かわいいよ！ もいつちよ！ そうそうそう！ ソレソレ！ なんて、神輿を担ぐ時の掛け声みたいな間の抜けた声を出している。そしてその撮影現場を4、5人の通行人が携帯のカメラで後ろからコソコソと撮っている。一人の汗だくのバンドナ中年男なんかは少し離れた場所からカメラマンより長いレンズでモデルを狙っている。

平和だなあ、と僕は思った。だけど僕も、そのモデルのあまりのかわいさに、さつき見た色んな国の悲惨な現状なんてすっかり忘れて、気付けば野次馬に混じってニヤニヤとしながら携帯でカシャリカシャリと写真を撮っていた。

○

深夜になって、突然目が覚めた僕は1Fに降りてリビングのテレビを付けた。どの局も通販番組ばかりでつまらない。テレビの電源を切つてから、家族みんなが使う古いノートパソコンでネット検索をかけた。

『鳥 飢餓 女の子 報道写真』

なぜかもう一度、あの写真が見たくなった。

画像検索をかけるとその写真は何枚か出てきた。だけど、僕が今日見たのと同じと違う構図、というか、さつきほどの迫力がないというか…たしかあればケビンなんとかって名前のカメラマンの…ん… photo by Brian… photo by

Alexis… photo by Abbas…

名前が違う。3枚出てきた写真の全てのカメラマンの名前が違う。

今度は『Kevin photography war』と検索をかけて、ようやくその写真が出てきたところで僕は、あつ！と思わず声を出した。

「そうか、この場所に他にも複数のカメラマンがいたんだ！」

頭の中で今日見た駅前のモデル撮影に携帯を向ける野次馬たちの光景と、飢えに苦しむ女の子の回りを囲むように色んな国のカメラマンがニヤニヤしながらレンズを向けて「シャッターチャンス!! いーね! いーね!」なんて言っている想像が行き交って、僕は少しゾツとしてしまった。

それと、なんだか胸が苦しい。この気持ちはなんだ、なんて表現すればいい。ああ、そうだこれは「ドキドキ」だ。裏返したテスト用紙を「はじめ!」の合図でめくる前のような、不安と興奮の入り交じった、ドキドキ。

台所のキッチンラジオを付けた。しょぼいラジオから渋滞情報が流れた。僕は選局のつまみをグリッと適当に回した。

ガー…ガー……ギョギョ…ヤン…ガー…  
チャンネルつまみを拾いかけている電波にゆつくりと合わせた。音楽チャンネル。

! ! ギャンギャン ヤンヤン ! !

レイジアゲインストザマシンというバンドのバレットインザヘッドという曲だった。

僕はリビングのソファにうつ伏せの状態で寝転んで、たたまれるのを待つて山になった洗濯物に埋もれながらふう…と鼻で息をした。そう、この感じ。今の僕の気分にはちょうどガツンとくる曲はこの感じ。

スウェットパンツのポケットから携帯を取り出して今日携帯のカメラで撮ったモデルの写真を見た。1枚はカメラマンと野次馬も入るくらいの遠さから撮った写真、2枚目はカメラマンのすぐ後ろから撮ったモデルだけが写っている写真。思ったよりもキレイに撮れていた。悪くない。そうだ、写真は簡単だ。シャッターを押せば誰にだって撮れる。

写真は…真実を…写す…

それじゃあ…悲惨な光景が目の前であれば僕にも悲惨な写真が撮れる?

かわいい人がモデルなら僕にもかわいい写真が撮れる?

…僕にも…できる? もしできるのなら僕は。

放課後に、ピカピカした緑色の廊下の上を、僕の歩く体育館シューズの足音だけがカツン カツンと小さく響いて返ってくる。

写真部の部室へは校舎の1階、体育館まで続く運動部の部室が並ぶ廊下の一番奥だと担任の秋月先生から聞いた。だけど聞いたはずのドアの前には「写真部」ではなく「体育倉庫」と書かれていた。…つたく、秋月の野郎、適当に言いやがつて…そんなんだから生徒からも先生からも空気みたいな扱ひ受けるんだよ、くそ…（こ）が…写真部の部室、な…わけない…だろ？

おそろおそろ「体育倉庫」の中に入ると、カビ臭く暗い室内には跳び箱、古くなつたバスケットボール、体育祭で使う玉入れのカゴなんかが適当に置かれているだけで、やはりそこはただの「体育倉庫」だった。すぐ近くにある体育館からダムンツダムンツというバスケット部の練習の音がかすかに聞こえてくる。

慣れてきた目でふと見ると、床に何かの束が落ちていているのに気が付いた。かがんでそれを手に取った。

「これ… 髪…の毛…？」

「俺のだ」

「うわあああああああああつ！」

飛び上がって声のほうに振り返ると、積み上げられた運動マットの上で、ぐねぐねの天然パーマで前髪だけが不自然にパツンと揃った男が暗闇の中で僕を見下ろしていた。笑っている。身長は僕と同じくらい小さい。なのに制服の上着だけがサイズを間違えたように不自然に大きい。男はボソボソと喋りだした。

「なあ、写真を撮るのに一番邪魔なものって何だと思う？」

「え…な、なんでしょう…か？」

「前髪だ」

「…はあ」

「だから、たつた今、切り捨てたんだよ」前髪が揃った男はそう言って不気味に笑った。

僕もまた「はあ…ははは」とだけ言って愛想で笑った。

「…1年の泉地健太郎くんだろ。秋月先生から聞いてるから」

「あつ、はい…あの…」

「部長の2年、高倉だ。と言つても部員は2人。俺と…君だ。さあ入れよ」男はぶつきらばうにそう言った。



体育倉庫の一番奥に写真部の部室へと続くドアはあった。しかしまたそのドアには「写真部」ではなく「高倉写真研究所」と古ぼけた厚紙にサインペンで書かれてあった。

ドアを開けるとそこは四畳ほどの天井が屋根裏みたいに斜めになったとても狭い部屋があつて、部屋の中にはパイプ椅子と古い机が1セットと古いプリンター、ネズミ色のスチール棚には床に三角座りした僕の目線の高さの段に色々な種類のカメラやレンズが綺麗に並べられていて、それ以外の段や、床にある数個のダンボールには何十冊もの写真集、写真雑誌、カタログが乱雑に詰め込まれていた。

「なんか：圧倒されますね」

「ふん。細江の薔薇刑から：ブレッツソンのポートレート集、ドイツの現代写真作家の作品集まであるぞ。ほら、グルスキーだ。図録だけだな：」

高倉さんはぶ厚い表紙の写真集を何冊も僕に手渡した。見たことも無い写真ばかりがそこにあつて、今から自分がこの本のページをめくると考えただけで、じわりと胸が高鳴った。

「はあく：これぜんぶ高倉さんの私物なんですか？」

「カメラはもともと写真部にあつたやつが多いけどな。本はほとんど：図書委員の大村を買収して学校の図書予算で手に入れた」

「ん：買収？ どうやってですか？」

「これが我が高倉写真研究所の闇の資金源さ」

そう言つて高倉さんが僕に手渡したLサイズの写真の束の一番上には、風に吹かれてスカートからひよつこりと顔を出した女生徒のパンティの写真があつた。

「……」

「泉地くん」

「……はい」

「写真部へようこそ！」高倉さんは両手を広げてニヤリと笑った。

「……」

とんでもない所に足を踏み入れてしまったと僕は思った。広川キエになんとかして追いつきたいと思つている自分が、広川キエと真逆の方向にクラウチングスタートをかけようとしている気がして途端に情けなくなつた。こんな所にいたら根性が腐る。落胆しながらパンティ写真の束をバラバラとめくつた。パンティ、パンティ、パンティ、パンティ、そして5枚目。

「えっ！……これ……」

「驚いただろ？」高倉さんはふんつ、と笑った。

5枚目には、タバコを吸っているこの高校の体操服を着た女子3人と、その隣で若い英語の男子教師鈴木がタバコを口にくわえて笑いながらタバコの箱をポケットに戻している写真があった。

「これがバレたらこの先生クビかもな。まあ謹慎はまぬがれないだろうな。くく。：図書委員の大村はな、こういう学校のスキヤンダル写真をたくさん集めてるんだ。いや、それを暴露するためではないらしい。毎朝スキヤンダルを1枚選んでカバンに入れて学校に来るんだとよ。お守りみたいなもんな、よくわからないけどな。「これでいつでも脅せるぞ」という気持ちで安心して繋がるらしい。変わってるだろ？ ふん：ま、おかげで、高倉写真研究所は資料が豊富に揃えられるわけだけどな」

「あの、これ、どこで撮ったんですか？：学校の中？」

「まあ、そう焦るなよ。：で、泉地くんはどういう写真が撮りたいんだ？」

「：何を撮りたいってのはまだ：具体的にはないんですけど：」

「ふん、じゃあ君は他の高校の写真部の作品を見たことがあるか？」

「いえ：」僕は首を横に振った。

「いいか泉地くん、高校の写真部にもコンテストに応募したり展覧会に出展したり、という一応の活動がある。しかし、だ。受賞作品を雑誌で見たり高校の写真部が主宰する展覧会に足を運ぶと、ほとんどが薄っぺらい青春を切り取っているんだ。運動部の練習風景や最後の大会に負けて泣く生徒の顔、少しだけ平均よりかわいいくらいの学内の女の子、夕焼け、女子の瞳に写る景色、校舎や制服の後ろ姿、生徒がみんなでジャンプしているところ：ま、そんなところだ。どれも同じような写真なんだよ。年表を見ても、フィルムカメラの時代からずっとそうだ。友情、努力、健闘、青春、それが必要なら自分が運動部に入ればいいと思わないか？ 自分の内にあつて、自分にしかできないものを追求してこそ写真表現であり、芸術なんだ。だから、我が写真部、いや高倉写真研究所では、そういったものを撮ることを一切禁止している！」

「あ：あの：そしたら、具体的にどういうのを撮るのが正しいんですかね？」

僕の質問に高倉さんは黙って下を向き、今度は上を向いて、窓のない部屋に窓を見つけたかのように遠い目をしてから、ため息を吐き出すように小さく言った。

「：俺は：考え過ぎて何を撮ったらいいのかわからなくなっちゃった：」

「：：：：：10秒くらいの沈黙のあと僕は「パンティでないことだけは確かですね」と言った。

「あれは…ビジネスさ」と高倉さんは言った。

「例外があるんですね…」

「商業写真と芸術写真の違いって言ったほうが君には伝わるかな？」

「パンティは商業なんですね…」

「…いいか、泉地くん、見えないものを撮れ。いや、といってもパンティという意味ではない。表現とは何なのかを常に考えろってことだ。本物って何だ。才能って何だ。常に孤独の闇に立ち、それでも踏ん張り、前も後ろも分からない暗闇の中を歯を食いしばり血を吐きながら歩いてゆく、その覚悟が、君にあるか？」

「今のところはないですね」

「しつかりしてくれよ副部長！」

「副部長… た、ただ…この間、報道写真展を見に行っただんです。で、この写真の何がすごいのかって考えた時に、まずカメラマンがこの場所にいることがすごいなって思っただんです」

「おつ！ …それで？」

「…でも、僕は戦場に行きたいわけじゃなくて。えっと、写真って記録なんだけど、あの日見た写真はどれも芸術的で…したら芸術的な場所に自分がいたら、自分にも芸術的な写真が撮れるんじゃないかって思っただんです。…やっぱりそんな簡単じゃないですかね？」

「いや、なにひとつ間違っただけじゃない。世界で一番美しい景色が見える場所があったとして、そこから写真機を向ければ誰でも世界で一番美しい写真が撮れる写真家だ。問題はその世界で一番美しい場所は自分の目で探し出さないとけないわけだな。…ほら、これを見てみる」

高倉さんは僕に一冊の写真集を手渡した。

「世界で一番美しい場所を知っている、世界で一番の腕を持つ写真家ライアン・マッギンレーだ」

「ライアン…マッギンレー…」

その写真集には何個かの付箋が付けられてあった。そのページをめくると、高い高い木の上に登る全裸の男女6、7人の写真、高い木の上から飛び降りる全裸の男の写真、花火の中で全裸で踊りながら笑う女たち、崖から全裸で転げ落ちる傷だらけの男、道路のガードレールをまたいで全裸で走り出す男女の後ろ姿…とにかく自分が今まで一度も見なかったことのないような美しい世界の写真「だけ」がそこにはあった。

「すげえ…」

「…だがな、技術的なことで言えばたいしたことはないんだ。マッギンレーは。奴より上手い写真を撮る写真家は世界中に、いや、日本にだってゴロゴロいる。何をして芸術かつてのは線引きが非常に難しいがな、技術と芸術は必ずしも比例しないってわけだ。マッギンレーの写真はものにもよるが、条件さえ揃えば…これでも撮れるよ。ほらっ」そう言っつて高倉さんは僕に緑色のおもちゃみたいなプラスチックのカメラを投げて渡した。パッケージにはかわいい丸文字で「写ルンです」と書かれていた。

「…これで？ これコンビニとかで売ってる700円くらいのカメラですよね。でもその、マッギンレーは世界で一番の写真家なんでしょ？」

「ああ。だがな、マッギンレーの写真はどの写真も、他の奴には絶対に撮れないんだ」

「撮れるのに誰にも撮れない写真…」

「…この全裸の6、7人が木登りしてる写真なんかはな、マッギンレーがモデルに指示して登らせてるわけだろ。だよな？ たまたま全裸で木に登ってる人を見かけて撮ったんじゃないよな。つてことはつまり、奴は世界で一番美しい景色を作り出す天才ってことになる」

「ああ…」

「そして奴の凄さは決してヌードを撮っているからではない、ヌードを撮る奴なんて世界中に腐るほどいる。近ければ彼女だったり両親だったり自分自身が脱いだりな。しかし、見てみる、このモデルたちの自由さを。自由なままに全裸で吹き出す花火に飛び込み踊り、なにかに取り憑かれたように水の中でセックスしている。これなんか、奴が指示して撮っているはずなのに指示される前に自分から進んで木の上や崖から飛び降りたように見えないか？ 見ろ、笑ってる。奴の写真作品になるためだったら死も厭わない、それはまるで宗教における教祖と信者の関係だ。ゾツとするくらい美しい光景を作り出す天才。気付けば自分も鳥肌が立って、マッギンレーの世界に引きずり込まれてる。…俺も最初はヌードを撮ろうと考えた。全裸で体育祭選手宣誓をする生徒の写真とかな。だが、物理的に不可能だとすぐに気付いた。第一なんて言う？ 君い、悪いけどポコチン出して選手宣誓してくれないかね、か？ そんなことを打診している自分を想像しただけで恐ろしい。逆に俺が運動部の奴にパンツを脱がされて女子の前に曝され携帯で写真を撮られた上に学校中に張り出されるだろう。逆マッギンレーだ。…だから、自分には何ができるのか、自分にしか作り出せないものは何なのか…考えて考えて気付けば、俺は何を撮ったらいいのかが分からなくなっていた。…とんでもな

い怪物だよマツギンレーは。俺にでもできるのに、絶対にできない。…そんな奴がこの狭い世界にいるってのに、俺たちは高校の写真部だとかいうぬるま湯に浸かって、まだクソ以下の友情、努力、健闘、青春を切り取るのか？ そんな写真には何の意味もない！」

「たしかに…でもどこにその場所があるのか…どうやったらその場所を作り出せるのか…」

「そうだ！ 常にそれを悩め。答えなんてないんだ！ 道はどこまで続いているのかわからないくらい遠いぞ？ 俺たちが足を踏み入れた写真の世界は底のない泥沼の底にあり、そして気が遠くなるくらいの絶景の地平線の先にある！ ところで副部长、カメラは持っているのか？」

「あ…たしか家に小さなデジカメなら…あと、携帯のカメラなら…」

「ふん、したらその写ルンですを君にやるよ。入部祝いだ」

「…あの…ありがたいんですけど…：…僕どうせならああいうのがいいです」

僕は神棚のように飾られている棚の上の大きいカメラを指差した。

「RB67か…中判カメラはお前にはまだ早い。いいか、その写ルンですは27枚しか撮れない。適当に撮ったら27枚なんて2分で終わる。1枚1枚、何を撮るかしつかり考えろ。お前に27回考える試練を与える！」

「…はあ…でも…なんか…やつぱり見かけは大事というか…：写真始めたんですと言つてさすがに写ルンですは恥ずかしくて出せないですよお」

「…納得いかない様子だな…よし、副部长。今から俺はお前を殴る！」

「はっ？ なんですですか！」

「気合いを入れる！ 言っておくが高倉写真研究所はバリバリの体育会系だ！」

「いやですよっ！ 第一まだ入部するなんて一言も言つてないじゃないですか！ だいたいなんだよ副部长って！」

「つべこべ言うな新人のクソが！」バチンツ 高倉さんが僕の眉間に平手打ちを入れてきた。

「いたつ、な、何すんだよ！」ポコン！ 僕はおもいきり高倉さんのアゴにアツパーカットを入れた。

「うわあああああ！」

高倉さんは床に倒れてえんえんと泣き出した。

「…：…あの…すいません…」

「うわああああああん！」

「…：…」

5分泣いたあとに高倉さんはピタリと止まり、寝転がったまま天井を見つめて言った。

「気に入った… ついて来い…」

「ど、どこへですか？」

「楽園、さ」

## 楽園

この学校には、スポーツ推薦に力を入れているために体育館が2つある。バレー部とバスケット部の使う大きいほうの体育館と、卓球部、剣道部が使う小さい体育館。写真部部屋がある体育倉庫から大きいほうの体育館を回って歩いて、学校裏口の守衛室を右に抜けて、やや離れにある小さいほうの体育館の非常階段を3階まで登ると、体育館の屋上に続く鉄の扉には鍵がかかっていた。高倉さんは、長いレンズを付けたデジタルカメラを肩にかけ直して、ポケットから小さく切った空き缶の切れ端を取り出して僕のほうに見せてニヤリと笑った。そして屋上までの鉄の扉の南京錠の鍵穴にアルミの屑を入れてゴチョゴチョと動かすと南京錠はガチリと音を立てて簡単に開いた。どうやら楽園へは危険を伴わないと行けないらしい。

「こつちだ。見てみる副部长」

屋上の角で、高倉さんが小さな声で僕を呼んだ。

「その副部长つての、やめてくださいよ…」

「ふん…今日はラッキーだな。もういるぞ…」

「なにがいるんですか…？」

「静かにしろ！ 下だ…この下…見ろ…」

屋上の角から見下ろすと、1年校舎と2、3年校舎の隙間が見えた。細長く六畳あるかないかの、陽の当たらない狭い狭い場所だった。僕はこんな場所があったことも知らなかったし、どうやったらあそこへ行けるのかも分からなかった。おそらく今日連れて来られなければ卒業するまで知らないままだっただろう。その場所で、キョロキョロと辺りを伺いながらタバコを吸う男子生徒の姿があった。「あそこはな、校舎の死角だ。2階の鍵が壊れた非常口の扉から出て、非常はしごをつたって下に降りないとあそこへは行けない。毎日放課後にここから覗いて

るとな、1週間1時間ずつ粘って、1回ないし2回はあやつてタバコを吸って  
る奴を見る事ができる。家で吸えばいいのにな。バレない程度のスリルを楽しん  
でるんだ。完全な死角などこの学校にはないのにな。バカで低能だよな。みんな  
バレるはずがないと安心しきってる。くくく…。何箇所かそういう場所がこの学  
校にはあつてな。そのどこもで、ああいう光景があるわけだ。くくくく…」

「あの鈴木先生と生徒と一緒にタバコ吸ってる写真もここで…」

「そうそう、あれなんか今年の体育祭の昼休憩中だったんだぜ。英語の鈴木は  
まだ若いからな、罪の意識が薄かったんだろうな。上からこの500mm望遠レ  
ンズで狙われてるとも知らないでな。くくく…。でもさすがに俺もあの光景を見  
た瞬間は正直震えたよ。写真を見た図書委員の大村も震えてた。その写真を職員  
室にバラまけばそいつらの人生、終わるからな。パンティ写真は3種類で1冊、  
誰と誰が付き合ってるくらいのスキャンダル写真は1枚1冊の交換だった美術  
本が、あの写真の時は1枚で3冊になった」

「はあく…高倉さん…あの人は先輩ですかね…」

「見たことないか？ 生徒会長の古川誠だよ。…人は見かけによらないなあ…く  
くく。ああいう奴でも所詮は中途半端なスリルで満足する程度の馬鹿ってことだ。  
まあ、あいつはたまにしかあそこに来ないけどな。…あつ、もう一人来るぞ。さ  
て、スキャンダルのおでました！ 感度は3200でシャッタースピードは30  
分の1くらいか…。…副部長、ぼーつとするな。あれ、一年だろ。靴の色が赤だ  
からな。知ってる奴か？」

「え。誰だろ…ああ…」

視界の先のピントが急にズレてぼやけて、頭に薄い膜がかかるようにボウツと  
した。

遅れてそこに現れたのは広川キエだった。

——なんで…キエちゃんがここに…

壁に背中をついてタバコを吸う生徒会長古川誠。その隣でひつつくぐらい近  
い距離で屈んで生徒会長を見上げて笑う広川キエ。何を喋っているのかは聞こえ  
ないけど、あの、誰にでも分け隔てのない笑顔を彼女は今、生徒会長に向けてい  
た。

古川が半分ぐらいの長さになったタバコを一吸いして息を吐く前に彼女の口  
元に持つていく。

——やめて、キエちゃん、お願いだからやめて…

彼女はタバコを受け取らずに首を横に振って笑った。











「タバコだつて…ウチらも聞いたときびつくりしたんだけど…3日前お母さんと一緒に帰つてつたよ…シヨックだよねえ」

「…そう…なんだ…」

3日前…あの日だ。あの日…

「キエちゃんは…一人でタバコ吸つてたの？」

「二人らしいよ。生徒会長の古川さん。実は古川さんとキエ、付き合つてたんだつて。ウチらにも隠してたんだね。シヨックだよねえ」

「…古川…さんはどうなったの？」

「さあ、どうだろ、詳しくは知らないけど、でも古川さんは次の日も普通に学校来てたから、あつ、ほら、あそこにいるよ古川さん。あそこの4人グループの…。だから、何も処分とかなかったんじゃない？ その日は古川さんの両親も来てたみたいだけど…」

「そつか…ありがと…」

ガタンッ

「おせんち…？」

僕の足は食堂の売店へと向かっていた。売れ残りのジャムパンを1つ買って、古川たちのテーブルの後ろについて下を向いた。

「…だろ？ やつばさすがだわお前」

「さすがに危なかったけどな、まあ、だから前から言ってるけどよ、主導権はどつちかをはつきりさせるかが重要なんだって。僕は何も知らないですって言ったら、口裏なんか合わせてなくても私が彼を誘ってやりました、彼は嫌がってましたが、だってよ。マジで迫真の演技ってやつを僕は見たよ。うんうん」

「お前、ほんと悪い奴だよなあ」

「ぎゃはは！ キエみたいに単純な奴はよ。真面目で純粋な部分と、憧れとか興味の間で揺れてるからよ、芯がないわけよ。だから主導権を握っているほうがこんな普通の普通だよって言えば、信じて何でもするわけだ。ぶっちゃけ笑いそうになること何回もあってキツかったわ。」

「…ってかよ、誰だよ中出しした奴！ あれが一番やばかったんだって。キエが何も喋らなかつたからバレてねーけどよ。あれバレてたら、僕にも非があることになるだろうがよ。はい、中出しした奴いつせいのーせで正直に手を上げる！ いっせー、のーせっ！ うわ、全員じゃねーか。バカだ。お前ら本物のバカだ。ギヤハハハハハハ！」

！！ギヤングヤン ヤンヤン！！  
！！ギヤングヤン ヤンヤン！！

気付けば僕は食堂を出ていた。

僕は午後の授業のことなんか完全に忘れて、ただ校舎の階段で上がったり下がったりを繰り返していた。頭の中がこんがらがって、もうどうしていいのかわからなかった。

！！ギヤングヤン ヤンヤン！！

頭の中でさつきからずっとレイジアゲインストザマシンのバレットインザヘッドがリピートでずっとずっと流れている。

！！ギヤングヤン ヤンヤン！！

情けないなあ。僕は…何も知らない…

！！ギヤングヤン ヤンヤン！！

バレットインザヘッド 頭をぶち抜かれるのさ！

！！ギヤングヤン ヤンヤン！！

バレットインザヘッド お前は洗脳されているのさ！

…なんだ、この感情は…真昼の廊下を歩いているのに真っ暗闇みたいに視界が狭い。

！！ギヤングヤン ヤンヤン！！

うるさい…いや、とても静かだ…うるさい！黙れ！

！！ギヤングヤン ヤンヤン！！

…：…：…僕は…何をすればいい？何をするのが正しい？黙って…みんながこのことを忘れるまで…黙って…黙っていればいいのか…分からない…分からない分らない。僕は彼女に何をしてあげれる？だいたい彼女の幸せって何だ？僕が望むものって何だ？分からない…分からないければ…何もしちゃいけない？くそ…くそ…くそ…くそ…

！！ギヤングヤン ヤンヤン！！

！！ギヤングヤン ヤンヤン！！

気付けば僕は写真部室のドアを開けていた。

！！ギヤングヤン ヤンヤン！！

！！ギヤングヤン ヤンヤン！！

！　！　ギャンギャン　ヤンヤン　！　！

「おい、もう授業始まつてるだろ！　早く教室に戻れ！」

「…鈴木先生………お願いがあるんですけど………ちょっとこっちに来て下さい」

「はあ？　なんだ泉地？」

「僕………広川キエの家の住所が知りたいんです」

「…何を言ってるんだお前？」

「先生………体育祭の時、生徒とタバコ吸ってましたよね？」

「………あ？」

僕は制服の胸ポケットから、1枚の写真を見せた。

「写真をばら撒かれたくなかったら、今すぐ、広川キエの住所………調べてきてくだ

ろ」

「………」

英語の鈴木は眉間に顔を寄せたなんとも言えない顔のまま、時が止まったように固まっていた。

「事を荒立てることを僕は望んでいません。教務課でも、学生名簿でもなんでもいい。簡単でしょ。今すぐ。時間がないんです」

「………」

「早く………行けよ！」

## ライアン・マツギンレー

呼び鈴を鳴らしたあとに、扉を開けて出てきたフリースのジャケットにスウェットパンツの広川キエが僕を見て驚いた顔をしたあとに、少しだけ笑った。

「おせんち：なんで？ ってか何その前髪：ははは：汗だくじゃん：今、夏？ あはは」

「いや：ちよつと：ね：通りすがったものだから：」

「授業中に通りすぎるの？：おせんちだけ課外授業？ ははは：」

「いや、休んでる間の：ノートを届けようと：」

「通りすがったんじゃないの？ あはは。ノートは？」

「……」

広川キエの眉毛は整ったままだったけど、化粧をしていないほつぺたには大きなニキビの跡が3つ見えた。僕は少しだけ懐かしさを感じていた。

「タバコのこと：聞いたよ：」

「ははは：やっちゃいましたあ：」

彼女の目が赤く充血して瞼が薄く腫れている。きつとたくさん泣いたのだろう。彼女の涙は全宇宙で一番似合わない。僕は彼女を見てられなくて、下を向いた。

「古川：さんとは：ちゃんと話したの？」

「いやあ、携帯取り上げられちゃったからあれから一回も話してないよ：。：。：。そっか、古川さんと私のこと：おせんちも：みんな知ってるんだね：ははは、ちよつと学校行きづらいな：ははは：」

「気にすることないよ：。みんなきつと寂しがってる：だから：次学校に来る時は何事もなかったようにいつも通り笑えばいいんだよ。そんなことより：。：。大丈夫？ いや、その気持ち的なのがさ：。なにか：。ひどいこと言われたり：してない？」

「……：。：。古川さんのお母さんに：。：淫乱って言われちゃったよ。なんでだろ、普通に付き合っていただけなのにね。ははは。メイクしてたから軽い女って思われちゃったのかな。ははは。濃すぎだった？ 言つてよお。ははは」

「キエちゃん、古川をかばったんだろ？」

「……：。：。考え過ぎだよ。ははは」

「あいつは自分が犯人だって名乗り出なかったの？」



「……あの人は、生徒会長だしき、進学も決まってるし…バレたら大変なんかもん」

僕はぎゆうつと胸が締め付けられて、息が苦しくなった。足が地面から少し浮いているように感じた。自分の大切な人が傷ついているのに、僕は何もできない。する権利がない。だって僕は…君の大切な人じゃない。僕はどうしたらいい？彼女が望むなら…古川を殺してやる…でもそんなこと彼女は望まない…僕にできること…それは…

「ね…キエちゃん僕、写真部に入ったんだ」

「…へえ…そうなんだ…」

「キエちゃん…」

「ん？」

「…こつち向いて笑って」

自分でもわかるくらいいきこちない笑顔をして僕は写ルンですを彼女に向けた。「やめてよ、おせんち…」だけど彼女は笑ってくれなかった。

「写真ってすごいよ。知ってた？ 真実を写すんだよ。ね、カメラのほうに向いていつものように笑って見せてよ」

「やめてってば…」

「笑えよ…」

「……」

「写真は全部写してるからな！ どれだけ君が上手く笑っても、それは嘘の笑顔ってバレるんだからな！」

「…おせんちが何をしたいのか…よくわからないよ…」

「僕だつてよくわからないよ!! 僕は何にもわからない。あのさ！ 言つとくけどさ！ 罪をかぶるとかさ、すげーバカバカしいと僕は思うよ！」

「おせんちに分かつてもらえなくてもいいもん！ うるさいなっ！」

初めて見た彼女の怒った顔に、僕はさらに体が痺れたまま固まって、涙が溢れて止まらなかった。

「ぼ、僕は……真実なんてひん曲げてしまうぐらいの写真の才能が、欲しい!!」

「……」

「君の写真をたくさん撮るよ！ 今の君をたくさん残すんだ。だから！ 未来の君が今の君の写真を見た時に、『あ、この時私幸せだったんだな』って君が錯覚するぐらいの、僕は写真の才能が欲しい！ 真実なんか残らなくていい！ 写真の才

能が、僕は欲しい！ライアン・マッギンレーみたいな、世界を変える魔法が僕は欲しい！」

「…私は…自分の意思でこうなったんだよ？」

「ふぎけん！キエちゃんのそんな悲しい顔は撮りたくないよ！」

自分が何を言っているのかよく分からなかった。

「なら撮らなければいいじゃん！」

「…いや、撮る！だって…」

「…だって？」

「だって…僕は…キエちゃんが…好きだもん…あんなクソと別れて僕と付き合ってください……………」

「……………」

僕の生まれてはじめての告白は二人の間に10秒の沈黙を呼んだ。沈黙を裂いたのは広川キエのほうだった。

「…1枚だけね」

「…え…」

「そのかわり…綺麗に撮ってね」広川キエはぎこちなく笑った。

僕はこくん、と頷いた。

「…いくよ？はい…チーズ」

カチンッ インスタントカメラの安っぽいシャッター音が彼女のぎこちのない笑顔を切り取った。

「多分だけどね…」

「うん…」

「多分プロの写真家は、はいチーズって言わないよ？」

「ははは…」

「あははははははは！」

彼女は涙で赤くなった瞳を潰して、笑った。

「……………あ…キエちゃん…携帯番号…教えて…」

「今さら？ あはははは！」

「ねえおせんち…もうすぐ…3年生の卒業式だね…」

「……………うん……………」

「……………よかったあ……………」

「……………（古川の最後の姿を見れるから？）……………」 僕は喉まで上がってきたその言葉を直前で止めた。

〇〇〇〇

「どうしてもやるのか？」高倉さんは何かを思い出すように少し上を見ながら言った。

「はい…もう決めたんです」

「…よし、お前に、いいことを教えてやろう。『後付けの説明』についてだ」

「…あとづけ？」

「ふん。すばらしい作品てのはな、時に『言葉なんかで説明する必要がないくらいすばらしい作品』である場合と、『一見なんでもない写真』である場合がある。例えばこのアンセル・アダムスの雪山の写真を見てみる。これに説明などいるか？ 圧倒的技術、圧倒的空間構成能力のすばらしい芸術に、説明などいらんのだ。次にこれを見てみる。何だと思う？」

「…傷？」

「そうだ。一見なんでもない体の傷のアップの写真ばかりを100枚並べた作品だ。これを見たとき今、お前はと思った？」

「いや…傷だなあ、くらいしか」

「だろ。しかし、この作品の説明に『母が私を産み出すために喜んで耐えた傷、命の尊さを表現した』とあつたら、どう思う？ 深みが増すだろう。なんだつまらない写真だな、とパラパラめくった作品の最後のページにその説明があつたらハツとしてしまわないか？ この説明つてのが『後付け』であつても、『嘘』であつても俺は構わないと思う。全てのことには実はたいした理由などない。でもそれでいい。理屈や根拠よりも前に動き出した行動こそが正解だ。そして人が人間の無様な生き方と直感的な行動に人は感動するのだと思う。少なくとも俺はな。くくく。…次に、この写真、お前には何に見える？」

「…パンティです」

「そうだ、次にこれは？」

「……………パンティです」

「これが100枚続いて、最後のページに『風はいたずら好きの変態です』と書かれていたらお前はと思う？」

「…変態はテメーだろーが。風のせいにするんじゃないよ…」

「……そうだ……」

「………いったい何が言いたいんすか、もう！」

「……やつちま、ええ！」

## ポップコーンシャワー

偏差値は中の中なのに校則だけがやたらと厳しい私立の高校だけあって、卒業式はよく統率がとれていた。生徒の誰もが勘付いている。『今、騒いだら鉄拳が飛んでくる』

生活指導の赤木が狂犬病のセントバーナードのような顔で生徒ひとりひとりを監視している。先月の予行演習の時点で、私語をした3人を含む3年のひとクラス男子18人が連帯責任で坊主になった。個人写真撮影の前の日だった。だから、卒業アルバムのあるクラスのパージは体育推薦クラスでもないのに完勝のオセロのように縦三列で坊主が並んでいるらしい。卒業生を兄に持つクラスメイトが話しているのを聞いた。

「つづきまして、卒業生による答辞。在校生、起立！」

ガタンッ 体育館の後方3分の2に座る約600人の在校生のパイプ椅子から立ち上がる音が重なる。誰一人としてタイミングは遅れていない。

「礼！」

在校生全員が同じ姿勢に傾く。スツという制服の擦れる音が薄く体育館に響いた。

「着席！」

ガタンッ

「卒業生代表 古川誠！」

「はい！」

古川が壇上に上がる。全校生徒、教員、来賓、保護者1300人を前に凜とした顔を向けて全く物怖じしない場慣れした様子で古川は喋りだした。

「春の風はまだ冷たく、それはまだ不安の残る僕たちの気持ちを表しているかのようで、しかし温かな日差しが僕たちみんなを眩しく包んで、それは僕たちをまだ見ぬ未来に勇気を出して進めと背中を押してくれているようです。21期生の

僕たちが保護者や教職員の皆様、在校生の皆さんのご臨席をたまわり今日無事卒業式を迎えられた喜びは何ものにも変えられません。思えば、在校生の皆さんと僕たちはこの春の温もりを肌で感じる佳き日に出会いました。入学したばかりの僕たちが先輩がたの背中をととも大きく感じたように、あの時在校生の皆さんの目に映る僕たちの背中が大きく見えたでしょうか。たよりないものでは無かったですでしょうか。今、告白します。正直あの時の僕たちには自信がありませんでした。…今、在校生の皆さんに僕たちはどう見えていますか？ 少しでも大きく見えているのなら僕たちは、この学校で皆さんと過ごした日々も無駄ではなかったと心から思えるのです」

僕の座る椅子の前には、ハスキー製の三脚に固定した古いカメラがある。Mamiya RB67という古くて大きいフィルムカメラだ。昔は名機としてプロもこぞって愛用したものらしいが、今となつては古いし、中判だし、何よりフィルムだし、好きな人は好きといったコレクターズアイテムのようなもので一般的な需要はないらしい。現に僕の目の前のこれも、写真部の部室で誰にも使われずに神棚に奉られるようにずっと置かれていたものだ。カメラには50mmの広角レンズと、外付けで別のメーカーのフラッシュも取り付けてある。

古川の送辞が始まったと同時に僕はパイプ椅子から立ちあがった。おそるおそる、ではない。まるで、この瞬間に立つことが行事として決められていたように、カメラと大きなバッグを持ってすつと立ち上がった。その自然さはセントバーナードの目をあざむいたほどだ。なにより、三脚を付けたカメラを持つていることが不自然なゆえの自然さだったのだろう。僕が運動部の目立つ生徒ならば、ここでバレたかもしれないが。誰にも疑問に思われることなく僕は体育館の上手をゆつくりと歩いて進み、壇上への5段の階段を上がった。まだ誰も気付いていない。というより、視界に入つてはいるが気にはしていない。

「これからは、どうか皆さんが、夢と希望を持って入学してくる後輩たちのお手本にならなくてはならないということを常に心に留めていてください」

僕が右側から大きく古川の後ろに回ると、僕の位置からは真ん中に送辞を続ける古川の背中と、全校生徒と保護者、来賓を含む1300人とは向き合う形になった。僕は三脚のアシを広げて置いて、念入りにピントを合わせた。といつても10秒もかけていない。そしてバッグのジッパーを全開にした。



3秒。たった3秒で何千個のポップコーンは地面に落ちた。

「……………うげえっ!!」

古川がこのあまりに特殊な状況に何秒か固まったあとに突然、前傾姿勢でゴバツと吐き出した。

バシャリ!

運良く? 2度目のシャッターはゲロを吐き出すタイミングに間に合った。そして最後に3度目の、バシャリ!

震える手をなんとか動かして、撮り終えたフィルムを5秒かけて巻き取るまでの間、体育館の時間が止まったように静まり返っていた。

僕はゆっくりと体育館を見た。

シンとしたままピクリとも動かない。まぬけな顔で止まったままの人人人…まるで写真のようだな、と僕は思った。

「……………へへ……………」

みぞおちのあたりにモヤッと違和感があったと思うと、どんと喉のほうに込み上げてきた。

「…ははははは!あつ、ふつ、ふふ…くっ…あははははははははは!」

その場に立ってられないほどだった。

腹をかかえていた僕が溢れ出るものを止めたのは30秒くらいあとだったと思

う。気付けば僕は壇上でもいきりセントバーナードに頬を平手打ちされていた。

バチンッ! ヒツという女子の悲鳴が体育館に響いた。

もう一度、バチン!

「お前、何しているのか分かってんのか!!」

「う、うるせえええ!!」

声変わりを終えてもまだ高い僕の声と抵抗は、自分でもわかるくらいにみつももない。

「おいつ、落ち着け!」

「おとおおとおお!!」

僕の小さな体は顔を真っ赤になるほどに抵抗したところで大人たちの手にかかればぬいぐるみのようにひよいと持ち上げられた。1分後には生徒指導の盛岡も加わって指導室に向かう廊下を僕は引きずり回されていた。頬がジンジンする。口の中は少し血の味がする。2度目の平手打ちが少し目に入ったものだから、ま

だ左目が開けられない。さっきの抵抗で学ランのボタンがほとんどが取れた。けど、僕は後悔なんてしていなかった。

僕は誰にも撮れない写真を撮った。  
それだけだ。

なんであんな、バカなことをしたんだ！生徒指導室ではそんなようなことを生徒指導の盛岡とセントバーナードが椅子に座る僕の目の前で交互に永遠と叫んでいた。オーディオスピーカーみたいだな、と僕は思った。盛岡が左スピーカーでセントバーナードが右スピーカー。ウーハーの効いたステレオの雑音が僕の目の前で鳴っている。そして、2つのスピーカーから1メートルほど離れた真ん中の後ろ、僕の真正面にはコンポの役割をするように、担任の秋月が会話に入らず、ただおろおろとしている。秋月は背が低く、ひよろつとしているのに不自然に出っ張った腹は中年男性そのもので、がたいが良い2人の男の間でおろおろとするその様は、もともとそういう顔なのと、本当に困っているのが合わさって、いつそう情けなかった。

「よそ見するな！」セントバーナードがおもいきり僕の目の前の机を叩いた。目の前で鳴ったダン！という音に僕は仕方なく、はい、とだけ答えた。

「お前一人のせいで大切な卒業式が台無しになったんだぞ！あやまろうとする姿勢すらないのかお前は！謝れ！今すぐ！」

「…すい…ません…」

「俺にじゃない、卒業生にだ！」

「……」

雑音との会話は成り立たない。どのくらいの時間か、散々怒鳴りつけたあとに「お前みたいな奴はこの学校に必要ないんだ！」盛岡がそう言ってセントバーナードと共に生徒指導室を出て隣の職員会議室に消えていった。秋月は二人に軽く会釈したものの、声は出さなかった。

六畳ほどの広さの生徒指導室には、長机をはさんで僕と秋月の二人だけ。沈黙。横目で窓の外を見ると、まだ昼前の白い陽が桜のピンクを風と共に揺らしていた。隣の職員会議室からは大人たちが今日僕が起こしたことについて口々に話している声がつつすらと漏れてきている。全部は聞き取れないけれどセントバーナードのよく通る太い声が「反省」「処分」「停学」「退学」というワードを放つ



ただけははつきりと聞こえた。当事者の生徒が隣の部屋にいるのにまったく生殺しのようだ。

「私は…今まででいちばん今日の卒業式が印象に残りましたけどね」

突然喋ったその声に顔を向けて僕が反応すると、秋月がインシュタインの有名な写真ように目を開いてベツと舌を出した。そして不思議がる僕の反応を見てから秋月は椅子をひいて僕の前に来て、机に両肘を乗せて無表情のまま「うまく撮れましたか？」とつぶけた。

僕は少し驚いたけれど顔には出さずにこくん、と頷いてから「誰にも撮れない写真が撮りたかったんです」とぼそぼそと答えた。

「…理由がちよつと弱いですね」と秋月は言った。僕は秋月が何を言ってるのかわからなくて、目線を外した。秋月はつぶけた。

「…冷やかすと情熱は違います。そして今日君がしたことが冷やかしてないことくらい、見れば分かります」

僕はもう一度秋月の方に顔を向けた。無表情のままだ。

「ただどうでしょうか、さつきまで君の前で説教をしていた先生、あの場にいる1300人の目には冷やかと同じに映っていたのではないですか？ そしたら、どうします？ みんなに弁解しますか？ そして君が弁解したら、彼らは聞く耳を持ってくれるような人だと思いますか？ どうします？ 前例から考えれば、本当に退学かもしれませんね。髪を染めてきただけでも1週間の停学になるくらいの学校ですから。そして残念ながら学校が出した処分をくつがえすような力は、私にはありません」

「それでもいいと僕は思ってます…でも…先生には迷惑をかけました。すいません。や…うん。退学…いやですね。すげー嫌です。退学になんかなりたくない。あの、変な質問ですいません…どうしたらいいと思いますか？」

僕が聞くと、目線を少しだけ変えて考えるような仕草をしたあとに秋月は言った。

「言い負かせばいいんですよ」

「え？」

「だから、自分がやったことが間違いないと思ってるのなら、君は君自身の正義の名の下に闘わなくちゃならない。ま、君がどれだけ本気なのかによりますが。もし、ただの過ちだと自分が思うのなら誠意を込めて謝罪すればいい。きつい処分が決まっても職員室の前で毎朝土下座すればいい。『僕は改心しました』と毎朝教職員全員の前で土下座しに来るような生徒の行動を無下にしたりは決

してしません。なぜ言い切れるのかって、人は慣れていない状況に臆病だからです。誰も見たことのないような誠意の見せ方をされたら、それに対してどうしていいかわからないわけです。それを逆手に取ればいい。そして、なぜそれをやったのか、理由がちゃんとあるのなら、それを誰でも理解できるように言葉で説明して、誰にも反論できないくらい、情熱で負かしてやればいい。…なんだか、おもしろくなってきましたね」

「……おもしろい…ですか？」

「はい、とても。…だって」秋月の顔はまだ無表情のままだった。

「だって、君が今日やったこと、私は今まで一度も見たことがなかったですから」僕は少し息がしづらくなった。

「もう、今の君には3つの選択肢しか残っていません。このまま学校に全ての処分を任せてそれに従うか、とにかく誠意を込めて謝り続けて処分をできるだけ小さく済ませるか、そして」

「…言い負かすか、ですか？」

秋月は無表情のままこくん、と頷いてから、またアインシュタインのようにベツと舌を出して、それくらいの理由があるのならね、と言った。

答えは決まっていた。

「……………できるだけ多くの教職員の方を集めてもらえませんか？ 場所はどこでも…そうですね、この隣の、職員会議室で構いません」

「…わかりました。そうしましょう」

ドアのほうに振り返る秋月の口元がほんの少しだけ緩んでいるのが見えた。

「あ、そうそう。誰にでも間違いはありません」ドアの前で振り返って秋月は言った。無表情に戻っていた。

「だから…どうせなら誰も見たことのないくらい盛大に間違いましょう」

今度は僕の口元が緩んだ。僕は目を開いて、ベツと舌を出して見せた。

ボタン、とドアが閉まり、今度は隣の職員会議室を開けるギツという音が聞こえた。

携帯を見た。……………14時台がもうすぐ終わる。

「皆さあん、集まってくれださあい！」秋月の情けない声がこちらまで聞こえた。

…始まった。…やるか、やらないか。僕は…やる。

職員会議室に集まった副校長を含む約十人の目の前にMamiya RB67と僕はいた。

問題を起こした生徒が教員を集めて何かを喋る。それがドラマや映画のように凶悪な面の犯罪者だったならばまだ絵になったかもしれない。しかし、僕のように小さく童顔で牛乳のよく似合う、クラスにいてもたいして目立たないタイプの生徒が自分たちの目の前で何かを喋ろうとしているその状況に、皆、どういう顔をしたらいいのかわからないと言った様子だった。秋月の言ったとおりだ。『人は慣れていない状況に臆病だ』

高倉さんは言っていた。『理由は嘘でも後付けでもいい』そして『とにかく無様にもがく』

僕は不思議なことを頭に浮かべていた。

(…なんだ、この学校に僕がいる意味…あるじゃないか。すげえステキな人…周りにいっぱいいるじゃないか…)

いける…気がする。

無表情の秋月が集まった教員たちに向かう形でゆつくりと喋り出した。困ったような顔をして大袈裟におろおろとしながら喋り出したのは、もしかして彼の演出だろうか。

「えー、すいませえん、皆さあん、この度は私のクラスの泉地くんが大変なことをしまして。それですすね、彼がどうしても伝えたいことがあるそうで、やはり、担任としては生徒の意思を尊重したいというのがありまして…なので皆さんに集まっていたいただきました。すいませえん。それでは…泉地くん」

「はい」

僕は、目を瞑ってふっ、と息を吐いてから目を開けて、頭の中に溢れる言葉をおもいきり爆発させた。

カシャン

ジー…

バシヤリ!!!

「…とても重い音がするでしょう。中判カメラのシャッター音は病みつきになる方が多いそうです。まず、卒業式のあとでお忙しい中集まっていたいただいてありがとうございます。最初に僕はできるだけ多くの教員の方を集めて下さいと秋月先生に頼みました。なぜだと思えますか？それは、一人や二人に向けて僕が理由を喋った所で理解に偏りが生じると思ったからです。伝言ゲームのように誤解した意見を主観的なことを混ぜて伝えられては困る、なので多くの方に同時に聞いていただきたかったのです。そして手間も省きました。何の手間が省けたか。謝ることができる、ということですか。この度は大切な3年生の卒業式に水を差すような真似をしてしまったこと、その点においては深く謝罪いたします。申し訳ありませんでした！」

…しかし僕には、今日これをどうしてもやらなくてはならない理由がありました。

僕が写真部に所属していることを知っている方はどのぐらいおられますか。あ、いえ、大丈夫ですよ。正直で。…担任の秋月先生1人だけです。そうなんです、先に知っておいてほしいのですが、僕は写真部に所属しています。そのことを前提に今から話すことを聞いて下さい。

僕は今日皆さんの目の前で写真を撮りました、よね？ちなみに合計で3枚撮りました。

例えば皆さんが写真を、いや、映画のほうが分かりやすいですね。先生方が何か映画作品を作ろうとした場合、何を重要としますか？ストーリーですか？配役ですか？スタッフとのチームワークですか？僕の場合のそれは完成度、言い換えれば品質でした。アマチュアが作ったからといって、プロと比べてあきらかに質の劣る作品は作りたくなかった。

想像してみてください、氷の世界をイメージしたビジュアル系バンドのプロモーションビデオのバックがドンキホーテのペンギンだったら『しょぼい』と感じるでしょう。NHKホールで宙に舞う小林幸子の紅白衣装が遠足で使い回したブルーシートで後ろがベニヤ板だったら気持ちよく年を越せないでしょう。セットが張りぼてで大根役者が演じる総制作費20万円の怪獣映画を18000円かけてまで映画館へ見に行かないでしょう。や、まあ僕は学生なので10000円ですが。

つまりこういうことです。僕はいい写真が撮れる。だけどセットを作るお金なんてもちろんない。エキストラを雇うお金も、自分で言うのもなんですが人望もない。でもいい写真は撮りたい。どうしたら完成度の高い写真が撮れるか。そこで僕は、ないのならば借りればいい、というふうに発想を転換させました。人の

セットを借りようと思ったのです。それで選んだのがこの卒業式という「セット」でした。

ご存知だと思いますが落語家が客を笑わせるための技術で『緊張の緩和』という言葉があります。ここでも分かりやすい例をあげましょう。アル中で骨までボロボロになった男の葬式で、皆が男との別れを惜しんで泣いています。この時点が緊張です。知人が『この金で、あの世で酒でも買えよ』と言って棺の中に1500円入れました。火葬後に骨を上げようと思いますが、アルコールで脆くなっていた骨は全て焼けてなくなり千円札も焼けて500円玉だけが残っていた。知人が言います。『お釣りは返さんでいい！』おもわずその場にいた親族を含む皆が笑いました。これが緩和。緊張が深ければ深いほど緩和が引き立ちます。僕は写真作品を作る上でも、この緊張と緩和がとても大事だと思っています。

卒業式には独特の緊張感があります。もちろん高校の卒業式は人生で一度しかやってきませんから、各々が3年間の学生生活を思い出し、泣いている生徒もちらほら。誰一人として私語をしようとしません。まるで葬式のような緊張がこの場にはあります。この卒業式という「セット」を借りて撮影をする場合、この緊張を、なにかで緩和させることができれば、誰にも撮れない面白い作品ができるのではないかと考え、その『なにか』を随分と長い間考えました。絶対にそこにあるはずがないもの、それでいてインパクトと遊び心があるもの。葬式の反対にあるもの：結婚式。結婚式にある演出を卒業式に盛り込む：そこで閃いたのがポップコーンでした。卒業式の厳格な雰囲気の中の結婚式のライスシャワーのように、パーティーのイメージを皆が持っているポップコーンが無数に空を舞っていたら、バカらしくて非常に面白い作品になるんじゃないかと考えたのです。

そしてここからが本題です。なぜ僕が写真を撮ろうと思ったのか。

実は高校生活が始まって約1年、いつからか僕は将来、芸術の道に進みたいと思うようになりました。しかしご存知のように、この学校は芸術に力を入れていません。美術、書道、音楽の内、どれかひとつを選択する授業があるだけです。僕は不満でした。では諦めるのか。いや、自分が夢をあきらめるのを学校のせいにはしたくない。そしたらどうしたら夢へと一歩近づけるのか。美術研究塾に通うことも考えました。しかしそれよりもまず、現時点で自分の実力はどれくらいなのかを知ってみたい。そしてその作品を自分の回りの狭い世界の誰かに見てもらって判断してもらおうのではなく、もっと広い世界で客観的に評価してほしい。そのために一番手っ取り早いのがコンテストに応募することでした。しかもでき

るだけ大きなコンテスト。プロもアマもこぞって参加するくらい大きなコンテストで賞を獲ることができれば僕の夢は夢ではなくなる、そしてその結果に自信をつけて、この学校からはじめて芸術大学に進学する生徒になってやると決心したのです。そのためには、少しでも妥協をすることは許されない。だから今日この撮影をどうしてもする必要がありました。やるかやらないかで、僕はやった。それだけなんです。

それが理由の全てです。しかし、それに巻き込んでしまった教職員の皆さん、保護者、来賓の方々、そしてなにより一度しかこない大切な卒業式を迎えた卒業生の皆さんには本当に申し訳なく思っております。改めて、申し訳ありませんでした！

…提案があります。

今日撮った僕の3枚の写真が賞を獲るか、獲らないか。その結果によって処分を決めていただけないでしょうか。賞を獲れなければ今日僕の言ったことは全て嘘になります。ただのイタズラで学校の風紀を乱しただけになります。だからその場合、僕は坊主でも、校内掃除1年間でも、全校生徒の前で見せしめの寒中水泳でも、どんなことでも甘んじて受け入れます。だからどうか、僕の可能性に少しの間だけ、時間をいただけませんか。そして少しの間だけでいい、今回の件について目を瞑っていただけませんか。

先ほど「退学」という言葉を赤木先生が言っておられるのが隣の部屋まで漏れてきていました。退学。実は僕もそれを考えていたところです。もし、賞が獲れなかつたら、これだけ皆さんに迷惑をかけたのですからそれも仕方ないと思っております。それくらいバカなことを僕はしました。…いかがでしょうか。皆さん一人一人の意見が聞きたいです。何か意見や質問のある方はいらつしやいますか？あ、ちなみにこの話は全てこの、 아이폰で念のために録画、録音させていただいております。どうぞ、よろしくお願い致します！」

それは初めての射精に似ていた。ずっとずっと土に埋もれたままの不発弾が突然暴発するように僕は頭の中からどんどんと溢れ出る言葉を呼吸も忘れるほどに爆発させた。

………誰も喋り出さずにシンとなった職員会議室は写真のようで、しばらくの間約10人の教員たちは瞬きをパチパチとさせるだけだった。自分たちが今日体験した事件が愉快犯や暴力的破壊衝動などの「悪」によるものではなく作品制作

という名の「正義」にすり替わったことに、納得はできないまでも「理解」しているからに違いなかった。どの顔もそれにどう答えるのが正しいのか、決めあぐねていた。教員を集めて自分の考えをまくしたてる生徒なんて今まで見たことも無かっただろうから、反論しようにも時間がかかったのだろう。ポカンとしていた副校長が回りを見渡してから何度か白い口ひげを触って言った。

「……まあ、ね、うん。処分は、今から我々が会議によって決めます。うん。泉地君もいろいろ考えてのことだったということとはよくわかったし。うん、でも、やつてはならないことをした、ということは十分に反省してもらおうということ……うん」

「はい、申し訳ありませんでした。副校長、どうか写真、楽しみにしててください。そしてもし賞が無事に獲れたら是非、校長室まで続くあの長く美しい廊下に、僕の写真を額に入れて飾っていただきたいと思っています」

「……そうだね、うん。そう……だね。うん」  
「ありがとうございます！」

結局、僕は反省文の提出と、その日から3日の停学処分を言い渡されただけだった。

処分を言い渡されるまでもう一度戻った生徒指導室で、秋月はひそひそと僕に言った。

「おもしろかったですよ。でも、あの、緊張と緩和の話、あれは、ちよつと強引じゃないですか？ 落語の緊張と緩和、葬式の話、葬式の反対は結婚式、だからポップコーン……なかなかこじつけです」

「正直その時、頭の中に浮かんだことをただ喋っただけで……確かにそうですね。思いつきつてバレバレですね。ははは」

「でも、よかったです。いいものが見れました。賞、獲れるといいですね」

「いや、実は……あれも全部、嘘なんです」

「……へえ……」

「全て後付け、です」

「後付け……そしたら、本当の理由は？」

「……好きな女の子を傷つけた馬鹿者への仇討ち、です」

「ははははは！ いい！ 非常にいいですよ、それは！ あ、でも、そしたらせつかくですし、出してみたらどうですか、コンテスト」

「はい：日本で一番大きなコンテストに出してみようと思います」

「それでいい。無謀とか、冒険とか、そういうのはいくつになっても面白いものです。期待していますよ」

「…はい！」

誰にも見られていないことを確認してからこっそりと写真部の部室の扉を開けると同時に高倉さんは言った。

「副部长： あれはまさしく作品のプレゼンテーションだ！ たいしたもんだ！」

「…まさかあの会議室での様子が全て僕の 아이폰 からニコ生で生配信されてるとは誰も思っていないでしょうね」

「視聴者である図書委員の大村からたつた今メールがあつた。写真集10冊、だ！」

「おっ！ 新記録ですか？」

「そうだ、新記録だ！ どうだ、俺のアイデアも悪くないだろ！」

「はい、部長！ 尊敬しちゃいます！ バレたらどうしようとハラハラしましたけど」

「くくくくくく！ 我が写真部の黄金時代の始まりだ！ くくくくくくくくくくくく」

俺も負けてられん。パンティとスキャンダル撮りまくるぞおおお！」

「いや、作品作れよ！」

「くくくくくくくく！ ライアン・マッギンレーをパンティ写真で超えてやる！」

「なんだよそれ。あははははははは！」

その日の晩に広川キエから一通のメールがあつた。

『サイテー』

その短いメールに、僕は少しだけ胸が痛くなつたけど、ふん、と鼻で息をしてから、ゆっくりと返した。

『キエちゃん、今日僕がした勝手な行動のこと、僕は謝りません。君は本当に素晴らしい人です。僕は知っています。君のくつたくのない笑顔はみんなを幸せにする力があります。だからどうか誰かをかばうためであっても、嘘をついたりしてほしくないんです。だから、あえて君にこの言葉を贈ります。 目覚ませバ

ーカ！』



※ 審査員総評 『高校生活を切り取った若さとエネルギーに満ちた作品。現役高校生である若い写真家だが、写真家としての運動神経の良さに関心させられた。今後、もつとスケールの大きな写真作品を作る作家に成長する可能性を感じる』

アジア圏の写真家の登竜門である日本で一番有名な写真コンテスト、ニューヨークオブフォトグラフィが主宰した東京の美術館での作品展示会。

僕の3枚の写真の下に「優秀賞」と書かれたボードと共に、大きくタイトルが貼られている。

『ポップコーンシャワー』

終